

科学研究費助成事業（基盤研究（S））公表用資料 〔令和4（2022）年度 中間評価用〕

令和4年3月31日現在

研究期間：2020年度～2024年度
課題番号：20H05630
研究課題名：非流暢な発話パターンに関する学際的・実証的研究

研究代表者氏名（ローマ字）：定延 利之（SADANOBU Toshiyuki）
所属研究機関・部局・職：京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：50235305

研究の概要：

現実の母語話者の発話は、しばしば非流暢になる。が、それは会話の中では非流暢と扱われず容認されやすい。では、母語話者の非流暢性は、日本語学習者や言語障害者の非流暢性とどう異なるのか？本研究はこの問題を、記述言語学・コーパス言語学・会話分析・第二言語教育・音声科学の共働により追究し、人工知能や日本語学習者が「母語話者のように非流暢で自然な日本語」を話せるようにする。

研究分野：言語学、日本語学、日本語教育

キーワード：（非）流暢性、コミュニケーション、誤用、言語障害、音声合成

1. 研究開始当初の背景

伝統的な言語学は、ニュース原稿を読み上げるアナウンサーのようなミスのないスムーズさを「流暢さ」と定義した上で、「母語話者は流暢に話す」と見なし、母語話者の発話が非流暢になる場合を無視してきた。

だが、現実の母語話者の発話は、よく観察すると、実はしばしば非流暢になっている。にもかかわらず、母語話者の非流暢性は、コミュニケーションの中では非流暢と扱われず、容認されやすい。

では、母語話者の非流暢性は、聞いた途端に誰もがそれと気づき、コミュニケーションにとって邪魔でしかないと感じられる「本質的な非流暢性」と、どのように異なっているのか？—この問題は、言語学だけでなく、多分野にまたがる問題であり、まったく研究の手がつけられていなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、コミュニケーションの中で容認される母語話者の非流暢性が、第二言語学習者の非流暢性や、言語障害者の非流暢性とどのように異なり、またどのように共通しているのかを解明することである。この問題は以下4つの問題に分解できる。本研究はこれら4つの問題に取り組む。

- 問題1（言語学の問題）：母語話者の非流暢な発話には、どのようなパターンがあるのか？
問題2（会話分析の問題）：それらはコミュニケーションの中でどのように容認され得るのか？
問題3（第二言語教育の問題）：学習者の非流暢な発話が同様に容認されにくいのはなぜか？
問題4（言語障害の問題）：健常者の非流暢性は、非流暢性全体の中でどう位置付けられるのか？

考察対象は、時間と労力の都合上、現代日本語（共通語）とする。ここでの「共通語」とは最広義の共通語、つまり多少の方言色が混じっても特にわかりにくくなければ共通語とする。

なお、研究の実証性を確保するために、本研究は、以下3つの具体的なモノづくりをはかる。

- 日本語母語話者の非流暢な発話の電子資料館（母語話者の非流暢な発話パターンの実例が、音声＋動画の形で示され、解説が付されたもの）
- 日本語母語話者のように非流暢かつ自然に話す音声合成システム（与えられた文字テキストをアナウンサーのように「音読」するのではなく、母語話者のように自然に、適当な箇所では非流暢に話すシステム）
- 日本語母語話者のように非流暢かつ自然に、日本語学習者が話すための日本語の教科書（日本語教員が日本語学習者に「非流暢性の教育」をおこなうための手引書を兼ねる）

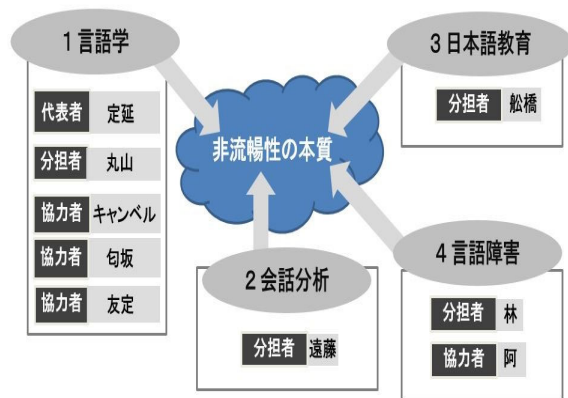
上掲の4つの問題に取り組む中で、これら3つのモノを開発し、それを通して、本研究の成果を広く世に問おうというのが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

記述言語学・コーパス言語学・会話分析・第二言語教育・音声科学という5つの領域の専門家の学際的な共働により、上記の目的を果たしたい。

問題1の検討は問題2の前提となっており、同様に問題2の検討は問題3の、そして問題3の検討は問題4の前提となっている。だが、各問題の検討の間に順序は設けない。これらの検討を行きつ戻りつ何サイクルも循環することで、分野間の障壁を突破し、広い視野のもとで、非流暢性に対する知見を深

め、統一的な枠組みを構築していく（図1・図2を参照。図では2つの言語学班はまとめてある）。



	2020 キック オフ	2021 学会 パネル	2022 中間 会議	2023 学会 パネル	2024 国際シ ンポジ ウム
問題1 言語学	母語話者の非流暢な発話/パターン抽出				
	会話収録・アノテーション・電子資料館開設				
	音声合成システム開発・印象評定実験				
問題2 会話分析	コミュニケーションの中での非流暢性許容の分析				
問題3 日本語教育	日本語学習者の非流暢性と比較対照・教科書開発				
問題4 言語障害	音響分析・調音運動の観察				

図1 研究組織

図2 作業スケジュール

4. これまでの成果

文法的成果：母語話者の非流暢な発話は、断片的で無意味なエラーではない。非流暢な発話の形式は整然としており、その発話形式に応じて特定の態度が醸し出される。

発話行為論的成果：ただし、非流暢な発話の形式と、醸し出される態度の間の規則的な対応は、話し手と切り離せない。非流暢性は、この点でコードとは異なる。

社会言語学的成果：非流暢な発話形式は、態度だけでなく、話し手が繰り出す発話キャラクタとも規則的に対応し、結びついている。非流暢な発話法のレパートリーは、話し手の成長に応じて、減るどころか逆に増える。

コミュニケーション論的成果：非流暢に話すことは、「権利」の行使でもある。皆の前でとっさに流暢に話せない話し手が、沈黙せずに「えーとー」「何だったかな」などと非流暢に話せるか否かは、当該のコミュニケーションにおける話し手の「立場」と関わっている。

言語教育的・言語障害的成果：言語学習者・言語障害者の非流暢性を「病的なもの」として、以上4点の社会的特徴を持つ母語話者の非流暢性から切り離すことはできない。

以上の成果を総合した結果、言語を越え、コミュニケーション全体にまで射程を広げた、非流暢研究の新展開が見えてきた。伝統的にコミュニケーションは「話し手がメッセージを音声信号にエンコードし、聞き手がその音声信号をデコードしてメッセージを復元し理解する」というコードモデルで捉えられてきた。だが、言語の中には、コードのように社会性を帯びているがコードではない「亜コード」がある。非流暢性の特徴をさらに追究することは、言語を越え、コミュニケーション全体の考察に貢献する。

5. 今後の計画

元来、図2のとおり、年次進行で新たな作業が始まるという形はとっていないので、基本的に現行どおりだが、海外で活躍している社会言語学・言語類型論・言語文化学・言語教育学・認知言語学の研究者たちの協力を得て、今後は英文出版にさらに力を注ぐ計画である。

6. これまでの発表論文等（受賞等も含む）

論文27件、著書2冊、招待発表6件、国際会議・学会等での発表48件。代表例5本を挙げる。

- “Is discourse made up of sentences?: Focusing on dependent grafted speech in modern standard Japanese,” Toshiyuki Sadanobu, *Journal of Japanese Linguistics*, 査読有, 37 (2), 151-180, 2021.
- 「自問発話の形式と機能」、丸山岳彦、『ことばと文字』、招待で査読無 14, 13-22, 2021.
- 「問わない「なに」：非流暢からの脱出装置」、遠藤智子、『ことばと文字』、招待で査読無 14, 23-33, 2021.
- 「学習者の母語を考慮した非流暢性の教育」、船橋瑞貴・趙南星、『ことばと文字』、招待で査読無 14, 43-51, 2021.
- 「中国語を母語とする日本語学習者による態度音声の音声分析：F0 曲線と 声質に焦点をあてて」、李歆玥（研究協力者）・石井カルロス寿憲・林良子、日本音声学会第35回全国大会、オンライン、2021年9月26日。【2021年度日本音声学会優秀発表賞】

7. ホームページ等

https://www.speech-data.jp/kaken_hiryu/kihon.html